

Title	赤木妙子, 柳田利夫著 『ハワイ移民佐藤常蔵書簡』
Sub Title	
Author	田村, 紀雄(Tamura, Norio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.2 (1997. 1) ,p.169(317)- 171(319)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970100-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970100-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 赤木妙子、柳田利夫著『ハワイ移民佐藤常蔵書簡』一九九五

田村紀雄

移民研究における「農民の手紙」の分析手法は、社会学者のW・I・トーマスとF・W・ズナニエツキの手により一九一三年に組織的に手がけられた。シカゴ学派に属することになる二人の学者は、ポーランドからシカゴへの大規模な農民の移民研究にあたり、アメリカから故郷へ送られた無数の往復書簡を蒐集した。

この書簡と分析は、一九一八年から二〇年間にかけて全一五巻、総頁数二、二五〇頁の『欧州と米国におけるポーランド農民』として刊行される<sup>(1)</sup>。この大著への評価をめぐっては、後々多くの論争をひきおこすが、民衆の手紙、日記、聞き書きなどを社会科学や人文科学の重要な資・史料として利用する「生活史（ライフ・ヒストリー）」という研究方法に道を開くことになる。また、アメリカに移民した多様なエスニック集団の調査研究方

法として、ヨーロッパやアジアからの移民研究に広げられてゆく。この中には、シカゴ学派の統帥R・パークらによる一九二四年の「日本人調査」もある。パークは、「社会・宗教研究所」等の資金援助により、米国西海岸とハワイでの日本人のライフ・ヒストリー調査プロジェクトを手がけた<sup>(2)</sup>。

日本においても、移民研究が「移民学会」の成立によって、学問として体系的に始められたばかりだが、民衆文書、ことに手紙類の蒐集と必要性は早くから提起されてはいた。私も、かつてシカゴ学派の手法に従って、栃木県から渡米した岩崎清七から、一八八四年七月以降片山潜等に宛てた九通の『米利堅通信』を発掘、紹介した経緯がある<sup>(3)</sup>。一九九六年秋におこなわれた町田市立自由民権資料館の石阪公歴らの「アメリカからの便り」の

展示企画もその一つだ。しかし、わが国における移民の手紙類の本格的な発掘作業は緒に付いたばかりである。

柳田利夫・赤木妙子の共編著による『ハワイ移民佐藤常蔵書簡——近代日本人海外移民史料——』（一九九五年）は、この日本における研究の空白に一石を投じる文献である。この手紙の主人公、佐藤常蔵は一八九八年、福島県の農村からハワイに渡航した契約労働の移民で、郷里に書き送った書簡が保存されていた。編著の二人はこの史料について、すでにいくつかの論文を発表している<sup>(4)</sup>。本書は八三通に及ぶ書簡の全文収録と参考史料、解説とから成っている。

解説によると、佐藤常蔵はオアフ島アイエア耕地の「契約労働者」をふり出しに、一二年間に約二〇種の職業・職種を体験する。その中には日本語新聞社でのアルバイトもふくまれている。移民先にあつて農業労働から、都市のサービス労働へ、農業地から都市部への移動は上昇社会移動の典型で、どの移民にも数多いケースであるが、佐藤の場合、この書簡類で具体的に裏打ちされている。これらの書簡は、一八九八年九月に始まり、一九〇九年四月まで一一年間のもので、残念なことに最後の書簡以降消息を絶っている。また、解説にもあるように、

書簡のほかに、ハワイでの新聞、写真類も日本へ送付したが、現存するものがない、とうことも欲をいえばきりがないが残念なことである。

さて、解説では、これらの書簡を、「回覧板」「名士」たちへの報告書、連絡、渡米勧誘、債権者への「約束手形」、保証人たちへの指示・依頼書などの性格として位置づけている。さきの岩崎清七の『米利堅通信』も宛先き名は複数であり、さらに手書きで複製されている。渡米した自由民権派の青年の手紙も家族らが、手書きで複製して残存することがある。柳田らは、まさしく、コミュニケーションの手段としての手紙に言及しているのである。由井正臣は、田中正造の五、〇二〇通の手紙を分析して、そのメディアとしての意義を位置づけた<sup>(5)</sup>。

しかし佐藤常蔵は文章を仕事とする知識層の出身ではない。農民が、これだけ詳細に異文化体験の驚きから、日米関係まで見措えて書き綴る努力と根気には敬意さえ払える。

佐藤常蔵書簡の中で目をひくのは、ハワイで発行されている新聞への頻繁な言及である。ズナニエツキたちも新聞の役割に一章を割いている。ポーランドや日本の一九〇〇年前後の農村地帯の新聞の役割と、言論の自由が

あり、ビジネスとしての可能性をもち比較にならぬほど発達しているアメリカでの新聞の役割の差異を、まず文化的衝撃として受けとめたことは言うまでもない。加えて、人間関係その他伝統的なコミュニケーションのネットワークの希薄な移民地で、情報源として新聞に依存する傾向は断然強かったからである。

次の箇所は史料としても貴重だ。

□<sup>日</sup>本人ニ於テ発刊スル新聞紙ハ三会社アリテ新日本新聞社布哇新報社や満登新聞社ニ有之此ノや満登新聞社ハ群馬縣人水野波門社長トナリ主監ハ三春ノ勝沼富造君ナリ執筆ハ三重縣人福喜多靖之助等ニ有之為メニ小生方ヘ同君等ヨリや満登新聞紙送付呉し候ニ付一見致居候右新聞紙ハ見ル處モナキ新聞ナルモ當地ノ景況丈ケハ略々相明リ可申ニ付今回東京横山久治方ヘ送付致シ候……」

水野波門は、サンフランシスコの愛国同盟の諸新聞で活動したが、ハワイ王朝の崩壊を知って、「政治介入」すべく急拠、ホノルルに移動した自由民権家である。ハワイでの言論活動は知られていたが、具体的には不明の点が多かった。佐藤常蔵はかれらと接触があり、新聞を入手し、内容の乏しさを批評しているわけだ。この『や満登新聞』は、発行部数、約三〇〇という説もあり、明

らかでない点が多い。完全揃いが発見されていないことにもよる<sup>(6)</sup>

柳田、赤木両氏の努力で集成なった佐藤常蔵書簡の刊行を機に、こんご日本各地に埋れている移民関連の民衆資・史料が発掘され、公刊されてゆくことを強く期待している。

注

- (1) Znaniecki, F.W. and Thomas, W.I., eds, *The Polish Peasant in Europe and America*. 5 Vols., 1918-20.
- (2) 田村紀雄「都市研究における一九二四年『日本人調査』の位置」『東京経大会誌』一九〇号、一九九五年一月参照
- (3) 田村紀雄『明治両毛の山鳴り』一九八一年
- (4) 杉田利夫編著『アメリカの日系人——都市・社会・生活——』一九九五年その他。
- (5) 田村・志村共編著『語りつぐ田中正造』一九九一年
- (6) 詳しくは飯田耕二郎「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」(田村編『正義は我に在り』一九九五年所収)を参照のこと。